

青蔵公路はこの世のものとは思えない

六月八日（火）午前六時過ぎ。物音に目覚めた同室の日本人に軽く挨拶をして、部屋を出た。閉ざされた門の木戸から足を踏み出すと、まだ夜明け前のラサ。歩道に人影はなく、暗い北京東路をときおり車や二輪タクシーが走り抜けるぐらいだ。まだ来ない迎えを待ちながら煙草を一服。夜明け前の街に立ちこめる冷気に思わず身震いをする。

ラサからゴルムドまでに五〇〇メートル級の峠を越えることになるので、シャツ二枚にカッターシャツ二枚、それにジャンパーといういでたちでできるだけ寒さに備えたつもりなのだけれども、やっぱり寒い。昆明の郵便局からトレーナーを送り返してしまったことを僕は少し後悔する。しかし昼間はそれほどでもないだろうし、バスの中は少しは暖かいだろうという希望的観測で、僕は僕を励ますのだった。

寒さのことよりも今はバスに乗れるかどうかの方が問題だ。售票処の職員は確かに六時半にホテルの前で待っているようにと言っていたのに、すでに六時半過ぎ。車のヘッドライトが通り過ぎるたびに身を乗り出すのだけれども、迎えの車ではない。英語と中国語をチャンポンした片言の会話だったから、何か思い違いをしたのではないかと、僕は少し心配になる。そして思い切って自分でバスターミナルまで行ってしまおうかとも思う。そのような僕の思いを見透かしたかのように、歩道脇に停車した二輪タクシー（客席は無蓋の荷車）の男が、乗らないかと声をかけてきた。一瞬迷ったのだけれども、迎えが来たときに僕がいなければとまどうだろうし、ここはあのとときの会話を信じて、それに賭けようと決めた。男には「不要」と答え、気を落ち着かせるために煙草にまた火をつけた。

バスの出発時間も近づき、バスに乗りそびれて售票処で交渉することなどが頭を過ぎる頃、ようやく服務員の車は到着した。なんとラサ市街では見たこともないような新型のランドクルーザーだ。運転は售票処にいた服務員本人。助手席に乗り込むと、あつという間に西蔵バスターミナルに到着した。

バスターミナルは一昨日とはうってかわって乗客たちで賑わっていた。服務員の指示に従ってゴルムド行きの列へ。

改札をすませてバスに乗り込むと、座席番号2の僕の席は運転席の反対側にある仮眠席のうしろで、横向きの席だった。バスは中国式で、運転席の隣にボンネットが飛び出しているというタイプ。運転手は二人

(四五才くらいと二五才くらいのともにチベット人)が交代で、ゴルムドまで直行する。

バスが出発すると、早々に僕は居眠りをする。yakホテルの前で乗りそびれるのではないかという心配に心細い思いをしたことも忘れて、心地良いエンジンのうなりに眠りを漂わせては、ふと目覚めるということを繰り返した。バスはまばらに草の生えた平原地帯を走っていた。小高い灰色の山地が広い平原を囲うようにして、遠くそびえていた。

昼食は清真食堂。見渡すかぎりなにもないところに、そこだけぽつんと二、三軒の小さな食堂や雑貨店があり、バスを降りた乗客たちは思いの店へと入っていく。彼らのあとをついて、僕も食堂へと入り、たまたまメニューとして貼り出してあった「拉面」を食べた。食後、出発までしばらく道沿いに散歩をした。どんよりとした曇り空の下に、石や土だけの大地がうねるように高くなったり低くなったりしながらどこまでも統いていた。煙草を吸いながら歩いていると身も心も芯から冷えてくるような感じた。標高四〇〇〇メートルを流れる風なのだ、とふと僕は思う。

昼食休憩を終えたバスは再び高原地帯を走り始める。土色の荒涼とした山岳風景とまばらに草の生えた草原。ふと、遠くに黒い大きな動物の姿を見た。それは牛ほどの大きさの動物で体は黒い毛におおわれている。

「yakだ！」と僕は心の中で声をあげる。初めて実際に目にするyakの姿だったけれども、テレビかなにかでその姿の記憶があったのだろう。荒涼とした風景に立ちつくすその姿はいかにもふさわしいという気がしたのだった。

ときおり現れるyakの他には羊の群れ、そして震えながら平原にへばりつくかのような姿を見せるチベット人の民家やテントがあった。

再びうとうととし、目覚めるとバスは山岳地帯に入っていた。岩山のただ中を走っているような印象で、あたりは薄暗く、おまけに雲が降っていた。標高とともに寒さはだんだんと厳しくなり、僕は腕をきつく組み、体を小さく丸めるようにして、小きざみに震えながら眠ったのだった。

標高四五〇〇メートルの峠を越えて、しばらくするとバスは街に着いた。それはナチュ(那曲)という小さな街なのだけれども、何時間も荒涼とした風景の中を走り続けたあとだったので、なにかほっとしたような気分でバスから降りて小休止したのだった。寒さはあいかわらずだったけれども、天候は一変して日がのぞいていた。

しばらくの休憩のあとナチュを出発したバスは次の街、アムドまで比較的標高差の少ない高原地帯を走った。アムドまでは三時間ほど。

夕暮れ近くに、公路沿いの食堂で夕食。あたりにはなにもなく、ただ食堂の小さな建物がぼつんと建っているだけだ。同乗者たちに従って食堂へと入り、同乗者たちが口々に、

「チンジャオ、チンジャオ」

と注文するので、それに同調してチンジャオ（青椒肉絲）とミーファン（米飯）を注文した。チンジャオはとびきりの辛さだったけれども、食欲はあったので全部食べてしまった。

夕食のあとはしばらく走って、アムドで給油。加油站（ガソリンスタンド）では乗客は全員下車し、給油が終わるのを待つ。安全のためなのだろうか、このあともバスの給油では何度か同じようなことを経験した。

いつの間にか日も暮れて、夕闇があたりをおおっていた。バスはなにかキャンプ地のように思える場所で停車し、年上の方のチベット人の運転手はキャンプ地の方へと歩いていった。彼はしばらくすると戻ってきたのだけれども、うしろから彼の娘のように思える女性が泣きながらなにかを訴えるように叫んでいた。言葉はまったく分からなかったけれども、僕にはごくたまにしか会えないことを悲しみ、そのことを非難しているように思えた。

青蔵公路（青海省の青とチベットの蔵）はそのあとタングラ山脈の峠、タングラ山口まで一〇〇〇メートル近くの標高差を登っていく。窓の外はまっ暗の闇で、しばらくすると闇の中に吹雪が降りしきった。バスの中は暖かいだろうとタカをくくっていたのだけれども、暖房がない（効かない？）ことはもちろんのこと、窓のすきまからは外の冷気が吹き込んでくる。おまけに眠気を遠ざけるためか、チベット人の運転手は窓を少し開けて運転しているの、そこからも冷たい風は流れってくるのだった。ただひたすら体を縮こまらせて寒さに耐えていた。

夜のトイレ休憩。まるでこの世のものとも思えない夜の山岳地帯で寒さに震えながら立ち小便をした。タングラ山脈は静まり、そびえ、そして凍てついていた。

標高が増すにつれて、少しずつ頭痛が兆す。それはどこか遠いところから兆し、少しずつ近づくにつれてやがてはつきりとした頭痛としての輪郭をあらわす。タングラ山脈の峠、タングラ山口は標高五〇〇〇メートルを超える。いくらラサの標高に慣れた身体であってもきついのだ。バスの座席で寒さに震えながら何度も深呼吸を繰り返し、ゆっくりと近づいてくる頭痛を遠ざけようとした。

やがて僕は眠りに落ちる。いくども眠りの水面にぼっかりと浮かび、その度に寒さに身を縮こまらせるのだったけれども、再びまた眠りの沼を沈んでいくのだった。夜中に一度パンクをしたらしく、ずいぶん長い停車を感じたけれども、それも定かではない。

六月九日（水）。一夜が明けると青海省は晴れていた。（ちようどタングラ山口がチベット自治区と青海省の境界にあたる。）天気は良いけれども、あいかわらずの寒さだった。湖は凍っていた。わずかに流れている川もあるけれども、まっ白に凍てついた川もある。山々は茶色い山肌をさらし、その五合目くらいの高さに雲が流れている。チベット側ではまばらに草が生えて薄緑色だった草原は、ここ青海省では岩と砂だけの大地になっている。

青蔵公路に沿って、時々人民解放軍キャンプが設営されていた。所々では道路工事をし、また河川の工事もしているようだった。また青蔵公路沿いにいくつかの街を建設するつもりなのかもしれない。工事現場のキャンプ地では女の人も混じって働いている。こんなところでよくもまあ、と感心し、僻地を開発する努力に敬服もしたのだけれども、一方で僕は素直に感心できない気持ちも持っていた。それはラサのスナックで聞かされた中国政府によるチベットへの入植政策のことが頭にあっただからだ。自治の拡大、深化をとまわらない開発は組織的な入植と一体だからだ。僕は少し複雑な感情を抱きながら荒野の工事現場を眺めていた。

朝食は再び清真食堂。肉汁にはるさめを入れたような汁。みんなが一樣にそれを注文するので同じものにしたのだ。寒さに凍えた身体に熱い汁は生き返らせてくれる感じがした。

朝食後、クンルン山脈までは比較的なだらかな道が続く。標高四五〇〇メートルから五〇〇〇メートルの高原地帯だ。しかし道そのものはなだらかな登り下りなのだけれども、このあたり、つまり青海省南部の青蔵公路ではいたるところ道路工事が行われていた。人民解放軍や労働者たちのキャンプがいくつも設営され、軍用トラックや貨物トラックがじゅずつなぎになって対行していく。工事現場では公路は通行止めになり、バスやトラックは道なき道のように思われる迂回路をその車体を大きくゆすらせながら延々と迂回するのだった。

寒さはいいかわらずだった。しかしこんな無防備な格好は僕だけかというのと、そうでもない。同乗の中国人やチベット人たちの格好も僕と大差はない。誰もが寒さに震えながらそれぞれの座席で耐えているのだった。ただ目先のきく男は運転手に煙草をふるまい、世間話にかこつけてちゃっかりと運転席隣のボンネットに腰を落ち着けていた。ボンネットの下にはエンジンがあり、そこは座席よりも少しは暖かいのだ。もちろ

んボンネットは男が二、三人も座ればいっぱいなので僕たちは彼らのシマをうらやましく眺めているしかないのだった。

昼近く、まばらに草の生えた草原地帯に大型の鹿のように見えるチル（長角羊）の群れを見た。乗客の誰かが見つけ、他の乗客たちも立ち上がったたりして感心したりしていたので、彼らにとってもめずらしいものだったのかもしれない。

やがてバスは昼過ぎにクンルン山脈に入ってしまった。青蔵公路の最後の峠だ。灰色にそびえる山並のかたわらをバスはどんどん登っていく。今まで上天気だった天候は一変して薄暗くなり、寒さは厳しくなった。雪は降らないけれども、すぐ近くにそびえる山々は縞模様様の積雪をまとい、その景色の寒さが実際の気温以上に僕を凍えさせるのだった。

長時間の寒さで、僕は特に下半身がしんどかった。それも膝から下。体全体に感じる寒さも辛いけれども、ジーンズ一枚だけの膝下からしんと染み込んでくる寒さは辛いのだ。あと少し、あと少しと自らに言い聞かせながら、バスがクンルン山口（クンルン山脈の峠）を越えるのをひたすら待っていた。

ようやく一時間ほどでクンルン山脈を越えたバスはゴルムドのあるツアイダム盆地（標高約三〇〇〇メートル）まで、一気に一五〇〇メートルの標高差を下っていく。その標高差が僕を解放してくれるのは寒さからだった。バスが坂道を下っていくその一メートルごとに凍えた身体が解きほぐされていくような気がした。それはまたラサからゴルムドまでの難所をようやく越えてきたというながしかの達成感のようなものをも僕にもたらした。

ようやくやって来た。そしてようやくの思いで僕がたどりついたのは、砂漠だった。

どこまでも果てのないような、土と砂だけの風景。視界のずっと向こうには灰色の岩肌をさらした山々がそびえていた。砂漠特有の背の低い、葉のとがった植物が生えていた。

バスは延々と続く下り勾配をうなりをたてて疾走する。水のない河。そして切り立った屏風のような断崖。気温は少しずつ上昇し、すでに寒さを感じない。乗客たちのあいだに旅の緊張は少しずつほぐれて、その雰囲気からも格爾木（ゴルムド）が近いことが察せられる。

やがてバスは砂漠の一軒屋という感じの加油站（ガソリンスタンド）に停車し、給油のために乗客はいったん下車する。加油站の建物の軒端に鈴なりになって、なにをするといふこともなく給油が終わるのを待っていた。

突然、風が強く吹いた。最初の風を感じたと思うまもなく、風はまたたくまに嵐のように激しくなり、少し遅れてやって来たのは砂嵐だった。突然やって来た砂嵐は舞い上げた砂を容赦なく叩きつけ建物の陰に逃げ込んだ僕たちめがけて殺到する。目も開けてはいられないし、呼吸もできない。ジャンパーの襟に口を強く押し当てて辛うじて呼吸をし、目を固く閉じて、砂嵐が通り過ぎるのをひたすら待っていた。しばらくしてバスが加油站から出てくると、乗客たちはみんなあわててバスに乗り込んだのだった。髪も服も、口の中も砂だらけだった。

バスはすぐに西藏バスターミナルに到着した。午後三時頃。砂嵐というような激しい風は治まっていたけれども、まだまだ風は強く砂がひどく舞っていた。おまけにしばらくすると雨まで降り始めるのだった。

西藏バスターミナルは道路の脇にぼつんとターミナルの建物が建っているだけだ。他にはなにもない。乗客たちのほとんどはすぐにそれぞれの目的の方へと散ってしまっただけけれども、とりあえず行き先のない僕は降り始めた雨を避けるために待合室へと逃げ込んだのだった。砂嵐の砂は雨に濡れて、泥のようになって服や鞆を流れていた。降り続く雨を呆然と眺め、それからいつまでもこうしてはいられないと、ガイドブックを開いてホテルの情報を仕入れた。

西藏バスターミナルはゴルムドの西はずれに位置し、すぐ近くには唯一の路線バスの停留所がある。路線バスはそこから東へ進み、ゴルムドのメインストリートを下り、南はずれに位置するゴルムド駅へと向かう。ホテルの格爾木人民政府招待所はメインストリートのほぼ中央部、市人民政府脇にある。

しばらくバスターミナルの建物で雨宿りをしていたが、すぐには降り止みそうにもないし、そんなにひどい雨でもないので、路線バスの停留所の方へと歩き始めた。

停留所には路線バスの姿はなかったけれども、たまたまミニバスが停車していたので乗車し、「市政府」と行き先を告げる。料金は二元。乗客は二、三人で、すぐに市政府に着いた。

ミニバスを降りてあたりを見まわすが、メインストリートというのに人影は少なく、たまに車が通り過ぎるくらいで、なにかがらんとした印象の街だ。

下車したところから少し歩くと、人民政府招待所は簡単に見つかった。少し緊張しながらフロントに向かう。心配しながら声をかけたのだけれども、不安に反して、簡単にチェックインすることができた。多人房（五人部屋）で一二元（F E C）。

階段を上り、部屋に入っていくと、三〇才前後くらいに見える日本人の男二人連れがいた。お茶を飲み、休憩しながら話を聞いてみると、彼らもラサからバスで着いて、明日はまたバスで敦煌へ向かうのだという。それを聞いて、僕も明日のバスで敦煌へと向かうことにした。もともとゴルムドには敦煌への中継点というつもりで立ち寄っただけだからだ。それに三〇年ほどまえから砂漠のただ中に建設されたというゴルムドは振興の漢族の街でほとんど見所というものはないというガイドブックの解説だった。日本人の若者の話では、敦煌行きチケットは火車站近くの長距離バスターミナルで買えるということだが、そのチケットを買うためには旅行証が必要だということだった。旅行証は招待所隣の格爾木賓館内にあるCITSで発行してくれるという。チケットへ行くのにも必要がなかった旅行証がどうしてここでは必要なのか理解に苦しんだけど、おそらくそれぞれの省が勝手に決めているだけなのだと思う。しかし必要なものは必要なだから、あれこれ言っても始まらない。

しばらく休憩してから招待所を出て、いったん格爾木賓館へ。CITSの事務所を覗いて、事務員の男性に声をかける。旅行証は簡単に書いてくれたけれども、一〇元(FEC)なり。

大通りからミニバスに乗って火車站へ(一元)。そこはゴルムドの南はずれにあたり、そのような位置も関係しているのかもしれないけれども、だだっ広い駅前広場のあたりにはただ駅舎があるだけで人影もなく、ただひたすらがらんとしていた。すでに雨は上がっていたけれども、空はどんよりと曇り、砂混じりの風があたりには吹きつけていた。

なにか嘘寒い気分で長途汽車站へ。人影のない售票処の窓口で、旅行証を差し出しながら、

「明天、到敦煌、一張」と告げる。

午前七時半発で四二元。もちろん人民幣で中国人と同じ料金。ラサーゴルムド間のバスは外国人料金を取られたけれども、あれはドル箱コースで外貨稼ぎのためだったのだろうか。それともできるだけ高料金にして外国人をチケットから遠ざけようということなのだろうか。ともかくなんとも納得のできない値段設定の仕方だ。

なにはともあれスムーズに敦煌行きのチケットを手にいれることができ、ひと安心。再びミニバスに乗り込んで、市人民政府前まで戻り、腹が減っていたので食堂を捜した。

通りを歩いていると、このゴルムドという街は最近砂漠のただ中に開発された街ということで、だだっ広くがらんとして、なにもないという印象だ。人影も、建物も、街路樹も息をひそめるようにして砂と風とに

耐えているようだ。人影が少ないからだろうか、街に生活感は乏しく、まるで軍隊の駐屯地とでもいった感じを受ける。

たまたま見つけた食堂を覗くと、そこは火鍋（鍋料理）専門の店で、ひとりではダメ、と断られた。並びの食堂に入ったけれども、材料が揃っていないらしく、注文してもできない料理が多くて、結局は青椒肉絲と鶏蛋炒、それに米飯で一五元。昼食を食べていなかったので、がつがつとむさぼったのだった。

雑貨屋で五星啤酒と紅梅を買い込んで招待所の部屋へ戻ると、日本人の二人の他に、台湾人とマレーシア人の女性が入っていた。男性と女性を同じ部屋に押し込むというホテルのやり方にはいつも不思議な感じがする。中国人であつても多人房では男女関係なく同室なのだろうか。それとも貧乏人の外国人旅行者など人間と思っていないということなのだろうか。ささいなことかもしれないけれども、たぶん人権感覚と関係があるように僕は思う。

しかしとやかく言つても始まらないし、せっかくの機会だから旅の情報交換。台湾人とマレーシア人の女性とともに華僑の子弟で、明日の昼発のラサ行きのバスに乗るのだと言う。片首の英語で、ラサや敦煌のホテルの情報などを交換する。あまりにかわいそうだから、ラサまでのバスのことは言わないことにした。というのも途中何度もあるトイレ休憩には公衆便所などという気のきいたものはないのだ。男たちはあたりかまわず荒野に向けて発射し、ふと女たちはと見ると、数人で連れ立って岩陰などに向かつて歩いていく。あとは想像しかないのだけれども、タングラ山脈の中など吹雪もあつたりして、女性が用を足すのはずいぶん寒いだろうと思う。

共同シャワーで体を洗い、砂嵐のなごりも洗い落してさっぱりした格爾木賓館の方からはカラオケの音がやかましく鳴っていた。荒野の果てのように思われる砂漠のただ中の街に鳴り渡るカラオケ。その音はやかましかったけれども、まるで空騒ぎのように寂しく僕には感じられなかった。長いバス旅行の疲れもあり、また敦煌までの一二時間のバスに備えて、五星啤酒の酔いに運ばれるようにして、早々に寝た。